文化

「人種」差別はなぜなくならない

生物、歴史、社会学的見地から多角的に問う

京大人文研がシンポジウム

「人種」による区分は現在、生物学的な見地からは有効性がないといわれる。にもかかわらず、人種差別はなぜなくならないのか。京都大学人文科学研究所がこのほど国立京都国際会館（京都市左京区）で開いたシンポジウム「人種概念の普遍性を問う」は、内外の生物学者や歴史、社会学者らが参加して、人種差別を歴史的経緯など根本問題から掘り起こす有意義な論議を展開した。

反人種差別運動は、昨年九月に開かれた世界人種差別撤廃会議（南アフリカ・ダーバン）で過去の奴隷貿易や植民地支配に対する賠償が議題に上がるなど、近年世界的な広がりを見せている。

シンポはまず、自然人類学者のローリング・ブレイス・米国ミシガン大教授が、皮膚のメラニン色素の量や赤血球の種類、歯の大きさなどについて、分布パターンの違いを説明。「肌の色や歯の大きさなど身体各部分の特徴に相関性はなく、地域による変化もなだらかで、はっきりした境界が見られない」として、まとまった特徴をもつ人種の存在を否定した。

斎藤成也・国立遺伝学研究所教授も、「アフリカ、欧州、アジアにおける人間の違いは、同じアフリカにいるチンパンジーの三種よりも小さい」と断言。肌の色などの外見的特徴も、それほど大きな違いではないことを強調した。

人種概念の普遍性について討議したシンポジウム
（京都市左京区・国立京都国際会館）

特異な日本人の解釈
不平等肯定する装置

にもかかわらず「人種」という言葉は、いまも根強く使われ、しばしば文明水準に関連づけて語られる。そもそも「人種」概念が登場したのは、まだ新しく、十八世紀ごろのことという。十九世紀に入ると進化論の影響を受け、頭蓋骨の計測によって人種間の優劣を論じる学説まで現れた。

新しい概念

英国リバプール大のロバート・ムーア名誉教授は、黒人を劣った存在とみる風潮が英国内に強まったきっかけとして、一八〇四年のジャマイカ黒人蜂起に着目。「人種差別が強まる時期と、社会の危機意識が強まる時期とは重なっている」と指摘した。日露戦争後、にわかに米国に「黄禍論」が生じ、日本人排斥運動が高まったことも想起される。

「人種差別は社会制度の変化ともかかわりがある」としたのは、米国の黒人史に詳しいオードリー・スメドリー米国ヴァージニア・コモンウェルス大教授。米国における黒人の地位は、十八世紀までは貧しい白人と同列にあり、中には身を起こして農園主にまでなる者もいた。ところが十九世紀に入ると、労働力確保のため奴隷制度が積極的に推進される。「その結果『自然の不平等』というかたちで人種概念が広まり、異なる人種間の結婚を禁止するなどの隔離政策が進んだ」。

一方で、同じ黄色人種でありながらアジアを植民地支配した日本の場合はどうなのだろうか。冨山一郎大阪大助教授は、一九四三年に厚生省が作成した文書「大和民族を中核とする世界政策の検討」を挙げ、「日本人は『文明化に成功した民族』として、その優位性が説明されている」ことに注目、日本の特異な意識構造を説いた。

「人種」は西欧から輸入された概念だったが、日本は人種概念の解釈を「文化的な優越性」に読み替えることでアジアにおける種別化を図ったというのが冨山助教授の主張だ。「こうした日本独特の人種解釈によって、石原慎太郎氏の『三国人発言』すら、人種差別だという批判を受けにくくなっている」。

部落差別と同根

静岡大の黒川みどり教授は、出自による排除という観点から部落差別問題を取り上げた。ダーバン会議ではインドの被差別民が「出自による差別撤廃」を議題に加えるよう要求しており、黒川教授も「出自による差別と人種差別の間に本質的違いはない」と強調した。

人種の規定に明確な根拠がないのに、人種差別は根強く残り続ける。インド・デリー大学のスバドラ・チャンナ助教授は、その理由を「社会的な不平等を普遍的に見せるための装置だから」と説明した。

人種差別はいまも欧州の移民排斥運動や、米国のアラブ系住民との摩擦となって現れている。人種間のIQや遺伝子を研究して差別を根拠づけようとする研究も後を絶たない。だからこそ「あらためて人種という概念の発生した背景を見すえることが、遠回りに見えても差別解消につながる」（竹沢泰子人文研助教授）というのが、出席者共通の思いのようだった。

（文化報道部　岩本敏朗）